

映画『二宮金次郎』5バリュー 勉強会

Five Value essences

感想文

当社の基本理念である5つのバリューと関わらせながら映画「二宮金次郎」を鑑賞し感想をしたためました。江戸時代の後期に度重なる天災による大飢饉で困窮を極めた危機の中で、荒廃する600もの農村を復興させた二宮金次郎を描いたものです。至誠＝まごころで勤勞し、収入に応じた一定の基準を立てて守る「分度」、余った収入を将来に備えるか他人に譲る「推譲」の基本からなる『報徳仕法』の考えを実践した物語です。

A. 次世代に繋げてゆくために広げてゆくもの

私たちが理念に掲げる5バリューも、メルル・リンチがコーポレート・バリューとして唱え、海を越えて、メルル・リンチ日本証券を通して私たちに伝えられたものである。

私たちは5バリューを心から共感するものとして位置づけるが、それをただ共感するだけではなく、5バリューに普遍性と永遠性を付与する、すなわち現在において広がりを持たせる、次世代につなげていくことが何より重要なものである。

ビジネスの理想と現実で、理想を見失わずに地に足をつけて現実のビジネスをやっていきたいと思います。

B. “道徳のない経済は罪悪”今後の業界は如何に!?

先進国は高度経済成長やバブル崩壊を経験し、また最近でいえば大国が軍事力を駆使して強く現状変更を図るなど、急激な価値観の変化に見舞われている。それによって使い捨て文化、暖衣飽食、格差社会と大きなエゴイズムを生み、自分だけが良ければよいという風潮が生じて、社会病理現象の温床となってしまった。

金次郎の報徳思想にはこれを再生するために必要な要素があるが、「道徳を伴わない経済は罪悪である。」を考えたとき、ある意味ゼロサム・ゲームの中で他から奪い取ることを勝利とも考える我が業が今後如何にあるべきか、悩み多い課題である。

C. 知識を蓄え物事をよく観察する実践を

「天地の真理は、不書の経文にあらざれば見えざるものなり」

とも金次郎は言う。すなわち、真理は直接自然現象や人間社会の研究により発見されるということであり、読書による知識の蓄積に加えて、現場で物事をよく観察することが重要である（逆に言えば前もっての知識の蓄積があって初めて、現場で真理を発見できるということにもなる）と理解する。例えば証券営業における内部管理の場面において、様々な規制やルールについてあらかじめ知識を広く蓄積すると同時に、その制定背景、顧客の考えや現場で実践するときの問題などにも十分気を配ることで、はじめて実践的かつ効果的な業務を行うことができると理解したい。

D. 知恵により改善してゆく決意

政治のせい、経済のせい、利権のせい。誰かのせいにするのは簡単だ。ただ、もし全てを解決したとしても、その先に幸せな社会はないだろう。そこからまた、新たな問題を見つけ出すだけだ。そうではない。犯人を見つけて糾弾するのではなく、問題点を見つけ、それをいかに自分達の考えで解決していけるか。その取り組み姿勢の決意こそが、当社の「5バリュー」であり、二宮金次郎の「至誠」であろうと強く感じた。

E. 率先垂範の姿勢にみる理想と現実のバランス

自分と家族のために、そして周りのためにという考えのもと、率先垂範で農業に取り組む姿勢をみて、今後の自分の人生においてもまずは自分と家族が豊かになり、お客さまと一緒に仕事をするメンバーとともに繁栄していきたい。ビジネスの理想と現実で、理想を見失わずに地に足をつけて現実のビジネスをやっていきたいと思います。

F. 危機における覚悟と廉直さを持つ胆力者

一心の覚悟を定めて徹底した誠実さで文字通り積小為大を実践しようと取り組まれ、農政改革を実行する上での数々の苦悩の末に、敵対するもの、相反する現象もひとつの実体として捉え、一円融合という報徳仕法というものの捉え方を編み出したのは物凄い胆力があると思います。

それ以上の心構えで支えようとする妻の健気な姿には、現代の日本人が忘れがちである廉直さ素直さといったものを強く感じさせられました。

G. まごころ = 至誠でお客様や仲間へ接し理想を追求

二宮金次郎が私財を使い、農民を支援し、頑張れば報われるという道を示し、希望を与え、やる気をおこさせ、自立を促していった手法は見事でした。現代社会にも、我々 5バリューアセットにも通ずる生き方だと感じました。

「徳」を持って仕事に取り組むことの大切さを再確認し、顧客や仲間に対し私利私欲を持たず、不満を持たず、誠実に対応出来ていたのか？努力できていたのか？これまでを振り返り、自分自身に問い反省したところです。映画にも出てくる「至誠」—まごころを持って顧客・仲間へ接しながら理想を追求していきたい。

H. 誠が人の心を揺り動かす

二宮金次郎さんの人生の物語について思ったこと。一言で言えば「誠」こそが「心」を持つ人間を唯一動かす動機なのだ。

I. 最期まで分度を貫いた二宮金次郎

心を打たれたのは、全部で3カ所。成田山のシーンの他に、最後の「私を葬るのに分を超えてはならない。したがって墓石を立ててはならない。ただ土を盛り上げてその傍らに松の木を1本植えておけばいい」という金次郎の遺言。

J. 5バリューと通底する理想

二宮金次郎が掲げた「至誠」「勤労」「推譲」「分度」「一円融合」は、すべてが繋がっているのであり、5バリューと共通していると感じた映画でした。自らが「誠実」に行動し、日々、継続・実行していくということである。

荒れた土地を一から開拓して畑を整備し、作物を育てる誠実さによって周りの人々にもその姿勢・気持ちが伝わる。さらに、その人々に誠実さをもって話をする事で、その気持ちを汲み取り、皆が動くようになるということである。

コツコツと積み上げることで立派な実が稔り利益をもたらす。それを実行した人には、誠意をもって評価をしてあげることで、一体感が生まれる。

映画の中で、当初、金次郎とは真逆の立場で描かれていたのが武士である豊田正作だと思う。土農工商という縦社会の象徴として武士の立場を描き、上が「からすは白い。」と言えば、それがすべて正しいと従う。間違えた行動であっても正しいと思込み行動していく。今の時代でも歴史のある大きな会社ではありえるようなことである。ただ、最後は、この豊田も自分の間違いに気付き、武士をすて農民になるわけであるが、これも金次郎が誠意をもって接していたことで、変わっていったということである。映画の後半で、豊田が荒れた土地を開拓しているときに、金次郎達が手伝う場面があった。立場の違う人々が誠実さをもって接しているうちに、お互いを尊重し敬う気持ちを持つという「一円融合」であり、チームワークとなっているのだと思う。この映画にも出てきたが「おテントウさまはちゃんと見ているから」と言われ、その言葉だけは、今でも忘れずに行動しようと思っているが、この映画は、その言葉を表現したような映画だと感じた。

K. 当社と顧客が「一円融合」により、互いに成長

「至誠」とは、「善悪」「貧富」「苦楽」「生死」等のあらゆる対立するものを一つの円の中に入れ融合させることによって、結果を生み出すことである。

二宮金次郎が成田山での断食修行の苦悩の末に得た「一円融合」の悟りであるが、この悟りは5Valueを掲げる我々の基本理念にも相通じるものがあると思う。

顧客との相対取引による債券売買を主な収益の源泉とする当社にとって、取引価格の観点からは顧客と当社は利益相反の関係にあるともいえる。

しかしながら、マーケット・金融商品に対する情報提供や顧客ポートフォリオに対する分析等、質の高いサービスを提供することによって、正当な対価として適正な収益を得ることは、結果的に顧客と当社の双方に利益をもたらすものである。

まさに、当社と顧客が「一円融合」となることにより、双方が互いに成長する結果が生み出されるものであると考える。

令和四年七月十二日

／了